
AJ ワークショップ

世界の難民と日本 —— わたしごととして考える ——

日時：2016年12月8日（木）16：25～17：55

場所：町田キャンパス 30号館3階30303教室

講師：石川 えり（認定NPO法人 難民支援協会 代表理事）

コーディネーター：河先 俊子（21世紀アジア学部）

石川えり：認定NPO法人で難民支援協会代表理事をしております、石川と申します。どうぞよろしく申し上げます。まずワークとして、次のことを考えてみて下さい。

皆さんがシリアにいると想定して下さい。シリアにいて、本当に爆弾が落ちてきて逃げなくては行けません。逃げなければいけないと決断するのはなかなかすぐできることではありません。でも本当にすぐ逃げなくては行けないということもあります。そういう時に何を持って逃げるか。沢山持って行く訳にもいきません。3つだけ持ち出せるとしたらどうするか？何を持って逃げるかというのを考えて下さい。

何を考えたか、皆さんにまず聞かせてもらいたいと思っています。勝手に当てていくので答えて下さい。何を持って逃げますか。

A 1：家族がいるのならその人を連れて行ったり、いないのであれば周りの人を連れて行こうかなと思います。

石川：本当に家族とか周りの人も助けながらですね。何にも持たなくていいですか？

A 1：人がいれば生み出すことも想像することもできると思ったので、3つということであれば最低でも3人連れて行けばいいかなと。

石川：ありがとうございます。（次の方）何を持って逃げますか。

B 1：水とパスポートと非常食を。

石川：すごく計画的ですね。水、パスポート、非常食。やはり東日本大震災があってから、結構水や非常食を常におうちに置いて用意しているという人も増えたかと思います。

C 1 : 服と身分証明書と水。

石川 : 水重なりますね。服、どんな服を持っていきます？これから、暖かい服を持っていきます？それとも下着の着替えなどを持っていきますか？

C 1 : 動きやすい服ですね。

石川 : 身分証明書とパスポートも重なりますね。身分証明書はどんなものですか？免許証とか？

C 1 : そうです。

D 1 : 財布と服とパスポート。

石川 : お財布。お金初めて出たかな。次の方、お願いします。

E 1 : パスポートとお金と携帯。

石川 : 携帯。携帯本当に多いです。去年シリアから逃れて、バルカン半島を渡ってヨーロッパに行こうとする人の流れをメディアで見た人もいると思いますが、ギリシャに密航船が来て、乗っていた人たちをまずギリシャの島で上陸するのを助けるという活動をしている人たちが NGO にいます。その人たちにまず、ギリシャの島に密航船で迎り着いた人が最初にする質問は何かというのを聞きましたが、「携帯の充電ができますか」という質問が多いのだそうです。バルカン半島を北上していくときも、どこどこの国でどこどこの国境が閉じた、こっちは開いた、ここに寝るところがあるよというのを、皆さんスマホですごくよく調べ、自分がどこにいるかも Google マップで調べて逃げていたというのも聞きました。

日本のメディアでも、よく「携帯を持っている人が難民になるんですか」「そんなお金がある人は難民じゃないんじゃないか」と言われたりしたのですが、逆に私たちが言っているのは、そうやって私たちと変わらない生活をしていた人がある日突然難民になるということをぜひ知ってもらいたいということなのです。では、次の列またいきましようか。お願いします。

F 1 : 水と食べ物とナイフ。

石川 : ナイフ。いいですね。果物とか剥けますもんね。ありがとうございます。

G 1 : ボートとお金と iPhone。

石川 : iPhone、携帯ですね。本当に重要ですね。では更に隣のほうにお願いします。

H 1 : お金とナイフと携帯。

石川：ありがとうございます。かなり必要なものが揃ってきたかなと思いますが、他に違うものを書いたよという人います？いないですか？皆さん、結構ここに取まっていますかね？もし違うものを考えたという人がいたら、今後使わせて頂くので、後でこっそりでもいいので教えて頂ければと思います。

やはり、すごく限られた時間の中で、すごく限られたものしか持って行けないとなると、皆さんも3つ選んで、他の人のを聞いて「あれもあれもなかったなあ」と思ったかもしれませんが、全部必要ですよ。全部必要なんですが、本当に水を選んだらかばんの中には他のものは入らないとか、非常食を選んだらやっぱり水は無理とか。持って行けたらいいんですけどもやっぱりナイフは入らないとか。そういう限られた選択の中で難民の人たちが逃げているというのはぜひ知って頂ければと思います。

それほど多くの人が言わなかったパスポート、身分証明書。これはとても重要です。シリアの人たちが何であんなに陸路で逃げていくか、何で飛行機に乗らないかという、陸路で逃げるのも密航業者にお金を払って密航してバルカンルートに行く密入国をするルートも、飛行機に乗ってヨーロッパに行くのとお金はそんなに変わらないと思います。

密航業者に沢山お金を払わないといけないうのは、もしかしたら飛行機のチケットを買う方が安いかもしれない。でも何でああやって密航業者に頼らなくてはいけないかというパスポートがないから。もしくは行き先のビザがもらえないからなんです。

パスポートとかビザとかすごく形式的なものですけれども、難民の人たちが難民になるというのを阻んでいるものがあって、それで、あの人たちは実際に逃げないといけなけれども難民になれないという状況が発生しています。

日本はすごく離れたところにあるのでそういう人の流れがどっと日本に来るとことは今のところあまり想定されていませんが、もしも近隣の国で非常事態があったら日本に30万人の人たちがボートで来るかもしれないという想定はされています。

ただ、やはりパスポートがあるかビザがあるかというところで非常に大きく変わってしまうということを知っておいてもらえたらと思います。

持って逃げるものに「家族」という方がいらっしゃいました。親戚や、自分の両親を置いてきてしまったとか、そういうことで苦しんでいる方は本当に多いです。後でジュディさんのお話というのをさせていただきますが、危険だし密航船もどうなるか分からないし、まずはお父さんだけ先に逃げて、安全が確保できたり、おうちが確保できてから、後から家族を呼び寄せると考えている人がとても多いです。家族を連れて行けないという人もすごく多いというのを共有させてもらえたらというふうに思っています。

そして、すぐ呼べる状態だから「3カ月以内に呼びたいな」とか「1カ月以内に呼びたいな」と思う人が、もう2年会えてない、家族に3年会えてないということが日本でも起きているということもお伝えしたいと思います。

レジュメに入っていきたいと思います。アインシュタイン。ヴァヒド・ハリルホジッチ、サッカー日本代表監督。そしてコマネチさん。私が話してるので察しがつくと思いますが、この3人

に共通することは何だと思えますか。

I 1 : ユダヤ人。

石川 : ユダヤ人なのはアインシュタインだけかもしれないです。惜しいです。何でしょう。

J 1 : 受賞をした人。

石川 : そうですね、受賞もしていますね。他には何かありますでしょうか。

K 1 : 自分の国で生活してない。

石川 : そのとおりです。なので、3人とも難民だったというふうに言えます。アインシュタインはおっしゃるとおりユダヤ人としてナチスの迫害を逃れてアメリカに来ました。

ヴァヒド・ハリルホジッチ監督は旧ユーゴスラビアのサッカー選手でしたが、内戦が始まってしまったんです。彼はその時に既に有名な選手だったので、自宅近くで銃撃戦が始まり、自分が止めに入ったら止まるんじゃないかと思って銃撃戦止めに入ったそうです。逆に撃たれてしまったり、戦争をやめさせようとして働き掛けたら、自身が銃撃されたりということで、危険を感じてフランスに逃れます。

フランスに難民として行って、サッカー選手として行ったと理解していますが、今では国籍もフランス。記者会見だとフランス語で話してらっしゃるのを聞いている人もいるかなと思います。

あとコマネチさん。ルーマニアの体操選手ですね。彼女もルーマニアの独裁政権から逃れてアメリカで一時期過ごしました。彼女はその後またルーマニアに帰れた人ではあるのですが、ヴァヒド・ハリルホジッチ監督はもう今はフランス人として活躍をされてらっしゃいます。

日本語だと「難民」という言葉は、何かができない、持てないという、すごく悪いイメージで言われることもあります。「ネットカフェ難民」や「就職難民」。お産をするのに病院が見つからない「お産難民」や、がんなのに治療が受けられない「がん難民」等です。

ただ、元々の意味の「refuge」は英語ですが、そういう意味はなくて、ただ「避難する」という状態を表しています。とはいえ、日本で「難民」というと、社会のお荷物というような意味合いがすごく強いなと思っています。

一応定義をしておくと、ここでいう「難民」というのは、「紛争や人権侵害から自分の命を守るために母国を逃れて日本に来た人たち」を指します。

少し詳しく分類すると7つほどになります。日本に辿り着いて、難民申請・審査をする前の状況の庇護（ひご）希望者。審査中の難民申請者。認定されると上陸難民。また難民認定ではないけれども「日本にいていいよ」という許可がもらえる人道配慮。また不認定になった人。この人たちがほとんどです。あとは政策として受け入れられたインドシナ難民や第三国定住難民の人たちがいます。また来年の4月から日本政府はシリア人で難民の状況にある人たちを留学生として日本に迎え入れていくというのを決めています。年間30人が受け入れられていく予定です。

(世界地図) ここが難民を送り出している国です。難民を送り出しているイメージの国名はありますか？

L 1 : アジアの国が多いです。

石川 : 結構アジアの国多いですね。濃い色が難民を送り出しているアジアの国になります。中国やミャンマー。あと、これがベトナムです。非常に多く難民を送り出していますが、それ以上に多いのがこの赤い濃い色ですね。アフガニスタン、シリア。これは南北分かれてないですが、スーダンと南スーダン。あとソマリア、コンゴ民主共和国。またシリアの近くのイエメンですね。イエメンも今非常に深刻な人道危機というふうにいわれています。

で、次が難民を受け入れている国になります。難民を受け入れている国。さっきのとちょっと見てもらえると分かるかと思うんですが、濃い国が難民を受け入れている国になります。難民を受け入れているイメージの国はありますか？

M 1 : アメリカですか。

石川 : いいですね。本当にアメリカは多く受け入れてます。濃い色が受け入れているところなんです。アメリカはここです。すごく色が濃いです。ほかに難民を受け入れているイメージの国はありますか？

N 1 : 日本。

石川 : あまり受け入れてないですよ。この色が真っ白です。日本の受け入れは後でぜひお話しさせてもらいたいと思います。

O 1 : 中国。

石川 : 中国は結構濃い色で受け入れています。

あとは皆さんに参加して手を上げてもらいたいですけれども。

難民を受け入れている国。先進国と途上国のどちらが多いでしょうか。

難民を受け入れているのは先進国が多いんじゃないかと思う人、手を上げてもらえますか。先進国が多いんじゃないか。アメリカとか中国とか今名前が出てきた国々がやっぱり難民を多く受け入れているんじゃないか。3分の1ぐらいですか。ありがとうございます。

途上国じゃないかと思う人。ありがとうございます。正解です。

途上国のほうがやはり難民を多く受け入れています。シリアの難民、アフガニスタン。例えばアフガニスタンの難民であればお隣のパキスタン、イランが非常に多く受け入れています。

またシリアの人たちも、今シリアの難民状態にある人は500万人ぐらいいるといわれていますが、そのうち半分以上280万人はお隣のトルコにいます。あとはヨルダン、レバノン、イラクと

というような周辺国にいます。

また南スーダンだったり、コンゴ民主共和国の難民の人たちもやはり近隣の国にいます。

日本は先進国ではありますが、日本よりも持たざる国、経済的にも苦しい国がより多くの難民を受け入れているというのを今日ぜひ知って頂ければと思います。

次。では難民問題の解決に向けて何ができるかというのを3つお話しさせてもらいたいと思います。

一番目はやはり紛争が終わること。難民を生み出す原因になっている元々の根っこが終わること。これが重要だと思っています。

ただもう一つ、では根っこを断つため支援をしないとかいうことではなくて、今もう難民となってしまっている人、国外に逃れている人、もしくは国内で残って逃れざるを得ない状況になっている人たちを支援するというのも同じく重要です。

もう一つ同じく重要なのは、平和で安全な国、日本のような平和で安全な国が受け入れるというのも重要だと思っています。

特にここ日本でできることというのは、1、2、3それぞれの働き掛けというはあるかと思うんですけども、私たちとしては、この日本でできる、平和で安全な日本で難民を受け入れる、ということにすごく集中をして支援をしています。この1だけ叶えばいいとか、3だけ叶えばいいというのではなくて、等しく全てが叶わなくてはいけないという中で、私たちの団体の焦点としてはこの3に置いているという形になります。

今シリアで起きていることというのを後で皆さんに映像でも見てもらいたいというふうに思っています。本当に第2次世界大戦以降最悪の状況といわれる紛争がシリアの中で起きています。今までは戦争にもルールがあるという中で、戦争をするにもちゃんとルールを守ってやろうということが、ある程度紛争当事者の中でも行われてきました。

ルールというのは民間人を爆撃しないということだったり、病院を爆撃しないということだったり、学校を爆撃しないということなんですけれども、それが今まさにシリアで起きてしまっています。

これはすごく残念で、小学校に爆弾が落ちる。また、人道援助の物資を運んでいる、援助物資を運ぶ車が爆撃される。あとは病院が爆撃のターゲットになるということが起きています。これはもう今までにもう本当になかったことで、人道的に大きな危機であるということを皆さんにもぜひ知っていただければと思います。

そんな中から逃げてくる人たちもいます。先ほど言いましたように周辺国。シリアがここにあるとするとトルコに280万人。お隣のレバノンに約100万人。ヨルダンに50万人。イラクにも数10万人。エジプトにもという形で逃げていて。トルコにいる人たちの大きな数がまたヨーロッパのほうに逃げているという状況なんですけれども、この離れた日本まで来る人たちもいます。

2011年の3月以前というのはシリアというのは非常に美しい都市でした。それがあつという間に紛争で破壊されてしまっています。ただ、そういうところから逃れたジュディさんのお話を

したいと思います。

ジュディさんは息子さんと 2015 年の 1 月末成田空港で 2 年半ぶりにというか、初めて再会できました。会うことができました。

初めて会ったというのは、ジュディさんが逃れた時に男の子はお母さんのおなかの中にいたんです。奥さんが妊娠していたのだけれども、ジュディさんが先に危なくなったので、まずは自分が逃れて生活がある程度安定してから家族を呼び寄せたいという思いで、先に逃げました。目指していたのは日本ではなかったんです。

ヨーロッパを、弟さんがいるイギリスを最初目指したのですが、イギリスに辿り着けず、日本でたまたまなのですが、難民申請をすることになりました。日本で暮らす準備というのは何にもしてなかったんです。

日本で難民申請をすることになって、何にも日本への予備知識がない中で日本に暮らすことになりました。半年経って難民申請の結果は出たのですが、不認定でした。

ジュディさんは住んでいた地域の有力者として、アサド政権が子どもを殺害したこともあり、それに反対するデモに参加しました。そのデモの参加者は警察に捕まる恐れがあり、ジュディさんも身の危険を感じて逃れたのですが、そういった主張というのがなかなか理解されずに、「難民ではない」というふうに言われてしまいました。

難民ではないという理由の中に書いてあったのは、確かに今のシリアで政府に反対するデモに参加すると、デモに参加する人たちは命の危険があるかもしれないとは書かれています。ただ、それはデモに参加した人たちみんなが危ないのであって、このジュディさんに固有の、ジュディさんだけが狙われているわけではない。なので、難民としては認められないという結果になります。

私たちは、これはすごく残念に思いました。本人としてもやっぱり納得できないということで、今も裁判で「どうして難民じゃないのか」ということを争っています。

これはジュディさんの家族みんなが空港で会えたときの写真です。奥さんと 2 年半ぶりに会うことができました。で、お嬢さん。来年は小学校に行きます。日本の中で育ってきて、日本に来てから 2 年近くになり、日本語もすごく上手になって、来年はもう小学校に行くのです。

日本の中で日本人と同じように教育を受けさせたいという希望をジュディさんは持っているの、日本育ちのシリアの子というのが今後本当に育っていくことになるのかなと思っています。

先日も別のシリアの方とお話ししていたのですが、シリアの人たちの少なからずの人たちがもう国に帰れないと思っているそうです。20 年はシリアに帰れないと思っている。国がなくなってしまったようなものだという事だそうです。

そんな中で、シリアの人たちがある程度集まって住んでいる地域もあるのですが、自分の子どもが小学校に行ってもアラビア語で子ども同士話していて、シリアの子どもだけでまわってしまっている。これは良くないので、日本人の家庭にそれぞれホームステイをさせて日本の中で暮らしていけるようにしたいという構想をお伺いしました。

それだけ日本社会の中で日本の人たちと一緒に生きていきたいという思いがすごく強いのだなというふうに思いまして、これはジュディさんから言われたことではないんですけども、彼らがもう国に戻れないという覚悟、また、日本の中で生きていくしかない、生きていきたいという

覚悟も見られた気がします。

また皆さんにワークで考えて頂きたいと思います。

こうしてジュディさんの家族が日本に無事来ることができました。先ほどは「すぐ逃げます、何を持って逃げますか」という質問から難民の人の気持ちを体感して頂きました。

次のワークです。ジュディさんたちの家族は2年半ぶりに会うことができました。2年半お父さんの準備を待つ間にジュディさんたちが住んでいたところはだんだん紛争が激しくなり、奥さんとお子さんたちはイラクの難民キャンプのほうに逃げています。

そういう中でようやく呼び寄せられて、家族と一緒に暮らすことができるようになりました。それでは、今日ジュディさんの家族がこちらに着いたとして何が必要か。ジュディさんたちの家族が日本で生活していくために何が必要か。短期的な中でのプランと中長期のプランと両方考えてもらいたいと思います。

お隣の人や前後で話し合ってもらって、それでは、先ほど話さなかった方中心に何人かの人に発表して頂きたいと思っています。それでは、考えるのを始めて下さい。

すいません。大丈夫でしょうか。まとまってきましたでしょうか。では、皆さんに発表してもらう前に、ジュディさんが来たシリア、シリアの人たちがなぜもう20年は帰れないと思うのか、まずこの廃墟を見ていただければと思います。最も内戦が激しかったホムスという町の様子をドローンで撮ったものです。

<映像> (約2分)

P 1 : いつごろの映像ですか？

石川 : これは2016年ですね。シリア・ホムス2016年 (Syria Homs 2016-YouTube) となっていて、今年の5月ぐらいにかなり世界中のメディアで流れました。本当の長いバージョンは15分とか20分とかあるみたいで、ただただこの廃墟が並んでいるというのが15分、20分ずっと見られるそうです。

お疲れさまでした。ありがとうございます。ただただ廃墟になったシリアの様子というのを見ていただきました。

こういうところから逃れてきて、こういうところを見ている人たちというのはやはり当面帰れないんじゃないかという思いを強くしているというのを知ってもらえればと思いました。

それではジュディさんの家族に関するワークに戻りたいと思います。ジュディさんの家族は到着して当面短い期間でどんな支援が必要になるのでしょうか。

Q 1 : 長期だとお父さんの仕事とあと住むために必要な日本語教育。

石川 : そうですね。お父さんの仕事どのくらいで見つけましょうか。

R 1 : 1カ月ぐらいは支援とかで住めそうなので、1カ月前後ぐらい。

石川：できるだけ早く自立したいですね。他にどうですか。

S 1：長期的にも短期的にも手続きが必要だなと思って、長期だとやっぱり家とか言葉とか、お母さんたちは仕事とかを見つけなきゃいけないなど。

石川：今、仕事、日本語と、手続きが出ました。他にお願いします。

T 1：住むところ。

石川：住むところですね。他にありますか。

U 1：長期的に見て医療保険とかの加入も必要になってくるかと。

石川：ありがとうございます。手続きの中に保険とかも入ってきますよね。医療保険。他にありませんか。

V 1：子どもとかの精神面のケアみたいな。

石川：皆さんさすがですね。子どものケア。やはり戦争のところから来た子で、子どもの絵なんです。海の中に人が落ちていく絵とかを描いたりするんです。すごく悲しいと思っていて。ジュディさんも子どもたちも、警察とか軍隊とか聞くとびくっとしてしまうそうなんです。

そういう子どもたちがどのくらいになってそれが完全に癒えたというふうに言えるかということすごく難しいんですが、でもやはり子どもながらの感受性の高さに注目して、特別にケアが必要というのはそのとおりだと思います。

W 1：住む家とか、あと身分を証明できるようなもの。

石川：身分証必要ですね。TSUTAYA の会員とかになるのにも必要ですもんね。

X 1：生活のできるお金とか家。

石川：お金も必要ですね。家も必要。他に「これもあるよ」というのを考えついた人いますか。

Y 1：人脈。

石川：人脈。助けてくれる人。ご近所とかの人脈、本当必要ですね。ジュディさんそういう意味ではすごくラッキーで、大家さんがとても親切な方だったんです。元々私たちの事務所に「難民の人に家貸しますよ」と電話してくださった方で、ジュディさんは家族をすごく呼びたかったの

で、もう1年以上前から「家族が来るんだ」と言っていたら、ジュディさんの為に、家族が来た時の為に「もうちょっと広いおうちを用意しておこうか」と言って用意して下さい。大家さんが1軒1軒回って「こういう理由でシリアから逃げて来ました」と言って下さり、近所とも繋いで下さったそうです。そういった繋ぎとか、日本でのご近所にいながら支えてくれる人の存在というのはすごく大切ななというふうに実感しています。

他にこういうのを思いついたという人はいらっしゃいますか。逆に留学生の人とか、私は日本に来て生活を始めたけど、こういうのが必要だったみたいな視点ってありますか。よろしいですか。

あとはジュディさん、お子さんの母子手帳などを持ってきていたんです。母子手帳持っていたんですけども全部アラビア語で、何のワクチンを打ったかというのも全部書いてあったんですけども、全部読めなかったんです。でもやっぱりお子さんが2歳と4歳とかなので近くの保健センターでつないでいく必要がありました。そういうときの子どもの精神面でのケアのみならず、やっぱり医療的なケアとして地域の資源とつながっていくのもすごく必要だったかなと思っています。

では、ちょっとこのくらいにさせてもらって、皆さんと同年のシリア人のお話を見てもらいたいと思っています。皆さんと同年のシリア難民の青年のお話なんですが、日本に来てどうだったかというのを見ていただければと思います。

< TV 映像：NHK ニュース >

難民に認定されても審査期間が数年に及ぶこともあり、その間苦しい生活を余儀なくされている人も多いといえます。去年初めて認定されたシリア難民の家族取材しました。

埼玉県で暮らすジャマールさんです。

ジャマール：去年12月政府から迫害される恐れがあるとして母、妹と共にシリア人として初めて難民認定されました。申請してから1年余り後のことでした。今年10月からは国の支援で日本語教室にも通えるようになり、ようやく日本での生活再建を目指せることになりました。

シリアの首都ダマスカスで大学に通っていたジャマールさん。サッカーが大好きでシリア代表に入ることを夢見ていました。ジャマールさんが住んでいたのは反政府デモが頻発する地域でした。度々政府軍から攻撃を受け身の危険を感じたジャマールさん。日本人と結婚した叔父がいたことから日本へと逃れることを決意しました。

シリアから持ち出せたのはわずかな服と日本円にして10万円ほどの現金。生活を立て直すにはすぐに働く必要がありました。ところが日本では難民申請をしてから6カ月間は働くことが認められていません。制度を悪用した就労目的での入国を未然に防ぐためです。

難民申請者に用意されている公的支援が、外務省が支給する保護費です。十分な現金や預金を持っている場合や、親族が日本にいて支援を受けられる場合などは支給の対象外となっています。ジャマールさんは保護費を申請しましたが支給されませんでした。親戚に頼り続けることもできず、日本で知り合った人たちからお金を借りてしのいでいました。借金は100万円に上りました。

難民認定申請者の支援を行っている NPO 法人です。ここではジャマルさんのように生活に困窮した人に寄付で集めた食料や衣類を提供しています。この団体が用意した宿泊施設は常に空きがなく、審査を待つ間にホームレスになってしまう人も少なくないと言います。

石川 (TV 映像内) : 本当に困窮してしまう。ホームレスにもなってしまうというのは避けたいと強く思っています。やはり申請中から支援とかあるべき政策というのを考えていく必要があるというふうに思っています。

難民認定されたことでようやく生活支援を得られるようになったジャマルさん。シリアに残っていた父も呼び寄せることができました。日本語をマスターしたら家族で働いて借金を返し、ゆくゆくは奨学金を得て大学に入り直したいと考えています。

今月下旬には国連難民高等弁務官が来日し、難民の受け入れなどについて日本により積極的な支援を求める予定になっています。

< TV 映像終了 >

石川 : お疲れさまでした。では、こちらのほうに戻っていきたいと思います。

ジュディさんの家族に必要なものは何でしょうかというところをお話しさせてもらって皆さんにもお答え頂きました。これがまさに難民を受け入れるということだというふうに思っているのですが、次、難民の人たちが社会の一員となるために必要な要素について輪にするとこういうことかなと思っています。

個人があって、その人たちが持つ権利。社会とのつながり。人脈と言ってくれた人もいました。これは本当に重要です。また、地域の中で見たときに、これも人脈ということになると思うんですけども、就労があって、日本語の教育だったりお子さんの教育があったりして、あと住むところ。医療。あと安心、安全を得られる場所に住むということも大切です。大きなところだと法的な手続きや制度。皆さんが言ってくださったことを、ほぼ網羅しているかなというふうに思います。

他に加えるとすると、地域の中にも入っているんですけども、例えばすごく宗教的に教会に行ったりモスクに行ったりして心の安らぎを得られるという人たちにはそういう案内もいるでしょうし、そういった地域社会や自分たちの民族に近い民族のコミュニティーなどもすごく大切だったりもします。

日本社会にどうやって住んでいくか。日本社会の人たちとどうやって共存、共生していくかという視点を「social integration」「社会統合」と私たちは呼んでいます。

「日本人のようになってほしい」「日本人のようになるんだったら歓迎」という人がいることもたまにあるのですが、社会統合の際に大切なのは、やはりジュディさんはそのままジュディさんでいい、ジャマルさんもそのままジャマルさんでいいということだと思っています。

先程、彼らには、日本社会に受け入れられていきたいという希望があるというお話をしました。その際に、多様性は無視しない、多様性を否定しない、そしてまた違うことというのを過度に注視しない、ということが大切かなと思っています。一人一人違う存在である、それは私たち日本

人もそうで、一人一人違うということを忘れない、ということがすごく大切な要素だと私たちは考えます。

また、違いから来る衝突というのは自然なことで、それを避けるのではなくてどうやったら乗り越えていけるかというのを一緒に考えることが必要ではないかと思っています。

難民の受け入れに必要なことというのは、整えていったり、用意していったりする必要があると思っていますが、それは受け入れ社会にとって将来に必要な投資だと思っています。難民を受け入れることによって日本の社会も変わっていくことというのが必要ですし、その変化を受け入れるということが必要だと思っています。

では、日本は難民の人たちとどう向き合ってきたかというのを最後お話ししていきたいと思います。

これが昨年のG7の国々で認定された難民の人たちの数です。ドイツが一番多くて約14万人。ドイツで難民申請した人の約6割は認められています。アメリカ2万3,000、フランス2万など来て、日本が27人、難民認定の割合としては0.6%、というのはあまりに少ない。

この数字が出た時、日本では99%の人たちは難民として不認定になっているという、ちょっと不名誉な記事が世界中に出ました。中東のメディアのアルジャジーラとかBBCなんかでも、日本は99%の難民を不認定にしているという記事が出ています。

日本はそれでも過去から数えていくと多くの難民の人たちがもう住んでいます。

先程言ったように、政策として受け入れた「インドシナ難民」の人たちが約5,000人います。そして、審査を経て難民として認定された「条約難民」の人たちがいます。先ほどテレビ映像に出たジャマルさんはこの条約難民に入ります。また、条約難民ではないけれども、ジュディさんや彼の家族は「人道配慮」に入ります。また、今申請中の人約1万人日本にいます。そして、「第三国定住難民」。海外に滞在していて日本には自力では来られない人を日本政府が迎えに行き、受け入れるという制度で、毎年30人を上限に、今年はマレーシアからミャンマー難民の人たちが来日しています。18人です。これで今までに7回迎えているので100人以上になっています。合計すると、概数ですが約2万人の人たちが既に日本では暮らしているという形です。

ただ、日本で難民となるためには、認定されるには非常にハードルが高く、ジャマルさんはその高いハードルを越えた人の1人なのですが、相当な量の資料を提出する必要があります。

ある難民として認定された人のケースでは600枚の資料を出しました。全て日本語で提出しています。難民申請の最初の申請書は28言語で準備されており、日本語以外でも書いてよいのですが、その他の申請書に関しては全部日本語訳をして提出するという事になっているので、これだけの資料を日本語訳にしました。その方はバングラデシュから来たジャーナリストで、元々の文章は、別の、ベンガル語で書かれていたり、英語で書かれている文章がほとんどです。それを全て翻訳しなくてはいけないということだったので大変な作業でした。

どういう手続きかという2段階に分かれます。最初は行政の中での手続き、次は司法で裁判になります。

行政の中での手続きに2段階あります。ひとつが「難民申請手続き」。そして次が「異議申し立て手続き」です。今、異議申し立てという名前ではなくなったのですが、便宜的に「異議申し立

て手続き」と言わせてください。

難民申請をすると法務省の入国管理局にて審査をします。本人へのインタビューがあって、その後、審査があって認定もしくは不認定という結果が出ます。不認定という結果が出た後は異議申し立てをすることができて、もう1回別の観点から審査をするという形になって認定もしくは不認定となります。

この四角で囲った行政（「申請手続き（入管）」→認定、→不認定→「異議申し立て手続き（入管）」→認定・不認定）の中の待機期間というのが平均3年間です。去年27人認定された方のうち、私たちが支援した方は5人でした。そのうちの3人の方は6年～7年待っていたという方で、非常に長い間待っている人たちです。

私たちが去年認定に携わった方のうち2人は裁判を経て認定をされた人でした。

ですから、「申請手続き（入管）」では不認定。不認定となってその後裁判で認定されたという方もいます。裁判で認定された方は全部で4年待っていた。4年。非常に長い期間、最低限の生活保障も非常に乏しく、かつ、働いてもいけないという中で生活してなくてはいけないという形になります。

では申請して審査を待っている間、どういうふうに暮らしているのか。先ほどジャマルさんは、見て頂いたNHKの映像の中で「すごく苦しかった。借金を重ねてしまった」というふうにおっしゃっていました。

私たちの事務所には狭い待合室スペースの中に、場合によっては10人以上います。お子さんも含めて待ってらっしゃる場合もあります。もう家がなくてへとへとになって事務所にたどり着いて、事務所ととにかく横になって寝たいと。横になるスペースもないのでとにかく自分の椅子で寝ているという方もいらっしゃいます。

私たちは何をしている団体かといいますと、日本に来た難民の人たちが食べたり寝たり働いたりする、当たり前前の生活を送れるように支援している団体です。

活動の柱は3つあって、一人一人への「支援活動」。また「政策の提言」、より良い政策をつくってほしいという政策の提言。また、日本社会に向けてのアプローチ。多くの人に日本に難民が来ていることを知ってもらいたいということで「広報活動」もしています。緒方貞子さんがトップを務められた国連難民高等弁務官事務所のパートナー団体でもあります。

私たちが支援する難民というのは、日本入国後から難民認定・不認定等が確定するまでの間にいる人たちが非常に多いです。

母国で迫害され、入国して難民の申請をします。その後、認定が人道配慮か不認定という結果になるのですが、その結果が出るまで平均3年かかります。特に入国直後から就労禁止の6ヶ月間、ジャマルさんが借金を重ねてしまったというようなところで、できるだけ早くお会いして支援をしていくということが特徴的なところというふうに思っています。

年間600人以上の方、去年ですと66カ国から来た方に支援をしました。主にアフリカ系の方が多くて、エチオピアとかコンゴ民主共和国、ウガンダ、ソマリアなどの方々も非常に多くいらっしゃいます。それから、シリア、チュニジア、パキスタン、ミャンマー等。私たちの、クライアントと呼んでいるんですが、お客さんである難民の人たちの約半数はアフリカからの人たちです。

狭い相談室ですが、基本的にはここで1対1でお話をお伺いします。家族で相談に見える

こともよくあります。また、一人一人のケースのファイルが置いてあった事務所の棚を、ファイルは倉庫に送って、難民の人たちの食料庫にしました。農家さんから送って頂いたお米をお渡ししたりします。事務所にはキッチンがないので、お湯と電子レンジだけで食べられるもので、缶詰や災害用食パンやカップラーメン等を用意して、食べていない、寝ていないという方に事務所で提供できるようにしています。

最近ではポールというフランスのパン屋さんがあるんですけども、そちらが食品廃棄をゼロにしたい、売れ残って捨てるパンというのをゼロにしたいというので、翌日私たちのほうが廃棄予定のパンを頂いて、難民の人にお出しするというような取り組みが始まりました。毎日スタッフとかボランティアの人がポールさんに行ってパンを頂いて、難民の人たちにパンをお渡しするというのもやっています。

ここの食料は寄付で買うこともありますが、多くの個人や企業にいただくことも多いです。日本は食料廃棄がとて多くて、コンビニとかスーパーとかでアルバイトされている方は気付いているかもしれませんが、賞味期限がかなり前でも、この棚にある商品は売れないから全部廃棄して入れ替えましようということが起きているんです。それはあまりにもったいないということで、そういったものを引き取ってまだ賞味期限内であれば必要な人に回していく、お渡ししていく、そういう活動をしているNPOがあります。セカンドハーベスト・ジャパンというフードバンクがありますが、そういうところと連携をして私たちのほうで難民の人たちが食べられるだろうなと思う食料を頂いて、事務所でお配りするという形にしています。

宗教的な配慮も必要なので、ハラールフード等は寄付で購入することもあります。ただ、予算にも限りがあるので常にハラールフードがある訳ではありませんが、事務所でもかなりのスペースを使って食料棚を作っている状況です。

次の写真です。難民の人たちがすごい熱心に、意欲的に授業に参加している様子が見えていただけるかと思います。これは日本語の授業です。最初ジャマールさんもすごく苦しんだように、難民の人たちは入国後半年間は働くことができません。

先程「ジュディさんにどういふうなことを支援しましょうか」という時に「やはり1カ月ぐらいで自立できたほうがいいんじゃないか。働けるほうがいいんじゃないか」という意見がありました。本当にそのとおりでと思います。

できるだけ早く働けたほうがいいというものもあるんですけども、やっぱり一方で日本語だったりとか、日本の仕事の習慣だったりというのに慣れるために少し時間も必要で、私たちは2カ月の集中コースを企業と連携をして提供しています。

授業は2時間なんですけれども宿題を入れると数時間はプラスアルファで勉強しなくてはいけないというコースで、非常に熱心に難民の人たちは参加されています。大体宿題で毎回漢字を10個ぐらいやるんですけども、先生が「この漢字を分かる人」と言うと皆さんがぱっと手を上げるといふうな具合です。こういう形で日本の中での仕事に向けて準備を積んでいくことになります。

ここを出た方々は2カ月間、日本語を勉強するだけじゃなくて日本で働くための心構えなんかもトレーニングしています。例えば10時から仕事が始まりますという、10時に会社に着けば

いいのではなくて、30分前か20分前には着いて制服があれば着替えて、10時にもう仕事を始められるという状況にすることです、ということも学んでいます。今は難民の人を雇いたい企業と難民の人のマッチング会をやっているんですけども、そういうところでもこの卒業生というのは必ず30分前とか時間厳守で集まっているというのがすごく特徴的なと思っています。

これはお話ししたマッチング会の様子です。ここのブースにいらっしゃるのが企業さんで、こちらで待っているのが雇用されたい、働きたいと思っている難民の人たちです。

こういう形で企業と難民の人たちの出会いの場を設けて、本当に難民の人たちにも普通の履歴書を書いてもらって自分のこともお話してもらおう。企業さんにも、企業がどういう会社か、何をしているか、どういう人材に来てほしいかというのを話していただく。そういう場を設けています。

本当に採用に熱心な企業さんは「今日はもう全員採用しようと思って来ました。会う人全員を採用しようと思っています」と言って、すごく熱心に「うちで働きませんか。うちで働きませんか」と声をかけたり、難民の人たちもまずはどういう企業か知りたいというのですごく熱心に質問をされていらっしゃいます。

そういう形で今まで就職に至ったという人は昨年度10社10人となりました。例えば、中小企業の物づくりの企業が非常に優れたスキルを持っているのだけれども、海外に輸出することにはまだ心理的な抵抗や語学面でのギャップがあるというので、それを難民の人たちに助けてもらって、もっと国際化したいというような出会いもありました。

そうやって難民の人を採用した企業が、それだけではないですけども、売上げが増え、今は7:3で売上が海外だということもあります。そちらは難民の雇用をされているということで経済産業省からも表彰をされています。色々な道が開けていく可能性があるなというふうに感じています。現在、来日から就職までの支援プログラムを整えていて、今年はずっと多くの人が就職できる見込みです。

こちらは、写真家の方とで共同企画した「Portraits of Refugees in Japan 難民はここにいます」(2016年6月@表参道駅)の写真です。難民というイメージがあまりに悪いと言われることも多いです。顔が見えないんですね。私にとってはもう事務所で日々お会いするジュディさんだったり、ジャマルさんだったり。一人一人に名前と顔がある、もちろんストーリーがある人たちののですが、難民という集団でくくってしまうと、どうしてもよく分からない人たちだという漠然とした不安とか、何か怖いんじゃないかとか、難民の人を受け入れると治安が悪化するんじゃないかと、そういうことを言われることもあります。そういったところに違う情報を流していくという為にも「難民の人たちはここにいますよ。日本にいますよ」というようなポートレート展をやりました。

モデルさんや雑誌のグラビアの表紙を結構撮ってらっしゃる宮本直孝氏と協力をして、表参道の駅のコンコースで、高さ1メートル80センチ、横1メートル、難民の人たち28人にモデルになって頂いて、皆さんのポートレートをばーっと並べました。ジュディさんの家族にも協力して頂いて、お母さんと息子さん、ジュディさんと娘さんの写真なども載せさせてもらいました。

「難民」「ここ」で検索して頂くと、ウェブサイトで一人一人の写真も見られますので、ぜひ見

ていただいて、どういう人たちがいるのか、知って頂ければと思っています。皆さんと年の変わらない人もいます。ジャマルさんもぜひ見てもらいたいなと思ったのが、本当に皆さんよりちょっと上か同い年ぐらいの人なんです。大学で学びたい、勉強したいという熱い思いをすごく持っていらっしゃるの、そういう人が同世代にいる、日本で生活しているというのをぜひ知って頂ければと思っています。

では、日本の難民問題とは何かということなんですけれども、これはまさに私たちの問題だと思っています。難民の人たちが何か問題を持ちこむのではなくて、彼らを私たちがどういうふうに入れたいのか、彼らと一緒にどういう社会をつくりたいのかというのを私たちが考えなくちゃいけない。私たちが彼らと一緒に答を出さなくてはいけない問題ではないかなというふうに思っています。

ぜひ今日皆さんに難民に関する話のスイッチというのを押していただいて、引き続き、新聞を見たりネットを見たり、様々な形で難民というのを目にすると思うのですが、そういった時に難民のことを考え続けていってもらえたらというふうに思います。

私の話は一区切りとさせて頂いてまだ10分程ありますので皆さんからぜひご質問やご意見を頂ければと思います。何かご質問ありますでしょうか。

Z1 : 21世紀アジア学部4年の者です。社会の動向についてすごく興味を持っておりまして、実は自分は台湾からの留学生ですけれども、やっぱり日本社会で留学していて自分でも多様性についてもすごく苦労して、自分のアイデンティティーについてもものすごく課題だと思っているので、難民の場合だと尚更だと思っています。その多様性を尊重する上で今の日本社会においての課題というか、その課題においてどういう取り組みをやっているのかについて詳しく教えて頂ければと思います。

石川 : ありがとうございます。実体験に基づく問題提起をありがとうございます。そういう問題提起がお伺いできたこと本当にうれしく思います。

私たちの多様性に対する取り組みは本当に遅れていましてまだまだです。やはり難民の人たち自身が、Z1さんもそうかもしれませんが、難民の人たち自身が周囲を変えているというほうが大きいのかなというふうに思っているんです。ただ日本社会自体は着実に変わってきていると思うんです。

とはいえ、大きなトップダウンの政策がないというのはすごく問題として感じています。この国会でも入管法の改正というのが通りました。すごい乱暴な言い方をすれば、もっと介護の働き手にも来てもらいましょうという話なんです。

短期で来てもらいましょう、終わったら帰ってもらいましょうということで、ゆくゆくは定着していく、社会統合していくという視点をあえて政策の中で見ないようにしているんです。それは現実とどんどんギャップが出てしまっていて、その点、本当に良くないと思っています。

ただ、やはり現場ではすごく変化が起きていると思っています。私たちの最大の強みというのは難民の人たちの名前も顔もストーリーもそれぞれちゃんと分かっているということで、それをもっと一人一人発信していくということが大切かなと思っています。

あと、ただ、「難民を知って下さい」というストレートなアプローチだけではなくて、色々な観点からのアプローチが必要だと思っています。文学や芸術からのアプローチも必要です。一つやっているのが料理のアプローチで、難民の人たちにお母さんの味、故郷の味を教えてもらったんです。難民の人たちはどういう料理を作るのかというのを教えてもらって、それを本にしました。それを今学食で提供してもらえるようお願いをして、10大学ぐらいでやってもらっていますので、国士館も皆さんが関心があればぜひ。

そうやって、料理からでもいいし、文学でもいいし、様々な入り口から入ることによって多様なものがあるということが様々な切り口から広がっていくといいなというふうに思っています。よろしいでしょうか。

Z 1 : ありがとうございます。

A 2 : お話ありがとうございます。ちょっと気になったのですが、入国庇護で希望で入ってきた人たちが、申請後6カ月は就労禁止と。その後難民申請を受ける期間も平均3年、長くて6年、5年となっちゃう人が多いと聞きました。NPOさんの方に食料をもらいにいたり、衣類をもらいにいたり、また寝ることのできる施設があったりと伺いましたが、多分それにはもうあふれ出るほどの人がいると思うんですけども。そして、ホームレスになっちゃう人もいるとのことですが、基本的にどういったところで生活なさっているのかなというのがちょっと気になりました。

石川 : ありがとうございます。話し足りないところを補って質問させていただいてありがたいです。

私たちの支援というのは、こうやって話す時は沢山やっていますという感じがするんですけども、難民の人たちのトータルな人数で見たら本当に少ないと思っています。ですから、足りずにホームレスになるという人もいますし、やはり私たち以外のところで社会だったり、自分の何かの繋がりに支えられている人の方が多いのではないかなというふうに思います。

その時にやはり自国とか近い国の人のコミュニティーというのはすごく大きな繋がりや資源になっていて、同じ言葉が通じる人が来日直後に会って、「家に泊まっていよ」とか「あそこで仕事がもらえるよ」とか、そこで日本の情報、「こうやって生活するんだよ」というのを教えてもらったりというところもあります。

あともう一つよく聞くのは宗教団体さんです。教会の談話室に泊めてもらっているとか、モスクなどは相当な人たちに、家があるというのではないんですけども、泊まらせている。困ったらモスクに行って共有スペースだけ泊めてもらっているという人たちは、私たちがシェルターを提供している人よりももしかしたら多いかもしれないというふうに思います。

私たちは去年46人の方にシェルターを提供しました。本当に安いアパートをお借りしてそれを提供しているのですが。シェルターなので、できる限り仕事を見つけてそこから出て自立していかれるように、もしくは政府の支援に繋がるようにと支援をしています。政府の支援に繋がっていく人の人数はとても少なく、200人もいないと思います。やはり大多数の人はどこかで自立をしながらその中で、地域社会の中、もしくはコミュニティーとかで関係性をつくりながら生

活してらっしゃるかなと思っています。よろしいでしょうか。

A 2：ありがとうございました。

石川：では、ちょうど鐘も鳴りましたので。今日は皆さんが熱心に参加して下さいましてすごく嬉しく思っています。私たちの団体ではホームレスの方が少なからずいます。この冬も既に10人以上います。事務所に行って6階のエレベーターが開くと目の前で人が寝ていたり、階段で寝ていたりというようなこともあります。日本社会の中でも最低限のセーフティーネットがない人がいるということを、難民のみならずなんですけれども、皆さんもぜひ心に留めて考えてもらえたらと思います。今日は本当にありがとうございました。